

ようこそ 図書館へ

第24号

2018年3月
津市図書館



おもな内容

P1～P2…図書館講演会を開催しました
P3………知ろう私たちの郷土
P4………図書館員のおすすめ本

図書館講演会を開催しました！

津図書館

金田一秀穂さん講演会 ～読書の勧め～



津図書館では、平成30年1月28日(日)に、杏林大学外国語学部教授の金田一秀穂さんをお招きし、「読書の勧め」と題して、講演会を開催しました。テレビなどでもご活躍のこともあり、多くの方々のご参加がありました。

まずは、元号のお話から始まり、子どもたちに次の元号を考える機会を作ってはどうかとの提案をされました。

金田一さんは、言語学者で有名な金田一京介さんの孫、金田一春彦さんの息子としてお生まれになり、本は読まなければいけない環境に育ってしまった(本人談)とのことで、ご自身の読書について思い出されるのは、小学2年生か3年生の時に病気で入院され、毎日ラジオを聴くか本を読むしかなかったため、お父さんの春彦さんが買ってきてくれた『週刊文春』『サンデー毎日』などの週刊誌を読んでいたことだそうです。今の学生などを見ていると情報が多すぎて大変だと感じるそうで、昔は岩波文庫を読んで足りなければ岩波新書、新聞くらいを読めばよかったが、今の若者たちは何でもインターネットであり、昔の情報量の500倍くらいあるとも言われ、どれを選んでいいかわからないのではないかと、でも、ほとんどが他で出ているものとほぼ同じ情報であり、それでわかったような気になっているのは心配。若い人に必要なのは、知っていること(知識)ではなくわかること、考えることであり、大学でも「まず何かを聞いたら本当にそうなのか疑いなさい」と教えているとのことでした。

どうしたら子どもが本を読むかということについては「親が家で本を読んでたら子どもも読むようになります」という言葉に、参加者の皆さんは共感していました。

読書のお話から、言葉について考えること、政治のことや、尊敬する作詞家の、なかにし礼さんのお話など、幅広い知識から繰り出されるお話に参加者の皆さんは引き込まれ、笑いの絶えないあっという間の1時間半でした。



▲ユーモアあふれる話に引き込まれます。



うぐいす図書館では、平成30年1月14日(日)に、児童書作家の杉山亮さんをお招きし、ものがたりライブと講演会を開催しました。杉山さんは、子どもたちに大人気の児童書作家で「ミルキー杉山のあなたも名探偵」シリーズなど数多くの児童書を出されています。また、自作のものがたりを語るストーリーテラーとして活躍しています。

午前中は、小学生から大人までを対象にものがたりライブを行いました。杉山さんは、新年初ライブで、様々なバリエーションのものがたりを披露してくださいました。合間に手遊びや言葉遊びを交え、参加された皆さんも一緒にしりとりや早口言葉に挑戦し、笑ったり、はらはらしたり、楽しい時間を過ごしました。

午後からの講演会は、大人を対象に「子どもとものがたりのいい関係」をテーマにお話しいただきました。「まずは、名刺代わりに」と始められたお話は、杉山さんがお住まいの小淵沢を舞台にした、ある昔話のパロディでした。虚実のあわいに遊ぶようなユニークなお話に、会場は一気に盛り上がりました。杉山さんの巧みな話術に操られるように、ものがたりの世界にすっかり引き込まれ、自分で読むのと違って耳から入るものがたりはとても楽しいことを実感しました。杉山さんは、ものがたりは幸福に生きることのサンプルそのもので、中でも昔話には日本独自の美意識や幸福感がうまく溶け込んでいることを「かさじぞう」に登場するお爺さんの無償の愛を例にして解説されました。昔話を伝えることは、文化の伝承で、子どもは多くのものがたりに出会うことで、多様な価値観を養い、心を育てることができるようです。さっそく、子どもたちに、ものがたりを読んで聞かせたい。そう思われた方は少なくないはずです。楽しい時間はあっという間でした。この講演は、大人の大事な役割を知る良い機会となり、参加者のみなさんは「私にできること」を個々に見つけていただけたのではないのでしょうか。

講演会の始めの小淵沢のお話は、『バナ天パーティー』という本に載っていて、津市立の各図書館で借りることができます。ぜひ、ご覧になってください。



久居ふるさと文学館では、平成30年1月21日(日)に、絵本作家の青山友美さんをお招きし、講演会「縁起だるまをつくろう!」を開催しました。

はじめに、青山さん自ら絵本「えんぎもん」の読み聞かせをしていただきました。柔らかい先生の声で会場はやさしい雰囲気に包まれました。

次に、いよいよ「縁起だるま」です。高さ約90cmの張り子の紅白だるま。青山さんと相談し、久居ふるさと文学館とポルタひさいふれあい図書室の職員で数十日かけて作りました。だるまが入場すると子どもたちからも歓声が上がっていました。この時点でだるまには全く顔が無く、のっぺらぼうの状態。青山さんの声掛けで、分担作業となりました。だるまの顔は青山さんが描きながら、並行して子どもたちを主戦力として参加者みんなで10cm×10cmの様々な「えんぎもん」・・・「ふくすけ」「おかめ」「えびす」たちに思い思いに色を塗り、だるまの体部分に貼っていきます。最初は「紅白」のだるまも、みんなで貼った「えんぎもん」で、カラフルな「姫だるま」に変身しました。だるま作りの締めくくりとして最後に青山さんが「だるま」の目を描きました。「目」に参加者みんなの注目が注



▲目を描き、だるまに命を吹き込みます。

がれる中、青山さん独自のこだわっている塗り方を教えて頂きました。最初から塗りたい色を塗らず、描くものに内在している色をある程度重ねて最後に表面の色を塗るそうです。「目」は、最初から黒で塗りつぶさず、赤色で目を塗り、次に藍色、そして黒を重ねて塗るそうです。こうすることにより黒の単色で塗りつぶすより、フチが単色にならず、様々な色合いがあることにより黒い部分が立体的に生きてくるとのことでした。

目も入り、完成した「縁起だるま」。早速、記念撮影会となりました。

参加者みんなで楽しんで制作した「縁起だるま」は、現在、久居ふるさと文学館入口に展示しております。ご来館の際は、ぜひ「縁起だるま」を見ていただき「縁起」を担ってください!!

知ろう私たちの郷土

齋藤拙堂の幼馴染で親友

しお た すい さい

塩田随斎②「稲垣文庫」の「塩田随斎書簡」・その他いろいろ 川上裕子

塩田随斎は、江戸時代後期に活躍した津藩士です。平成三十年が生誕二百二十年記念の年であることになみ、前回と今回は塩田随斎にスポットを当てています。

儒学者で藩校の講官を勤めていた彼は、「豪邁」で「酒を好んで客を愛し」来客があると必ず酒宴を催し、酔った時は「大気焔をはいて客を圧倒した」と伝えられています。また、彼は江戸の染井の屋敷が火事に遭った際に多くの蔵書を失ってしまいました。その悲しさや辛さは、『随斎詩鈔』（橋L91.9-47）に収録されている「三十年心血注在二三巻一朝歸焦土斷送人生半」（「三十年の心血注いで三千巻に在り、一朝焦土に帰し人生の半を断送す」）という漢詩からも伺えます。この後、焼失した以上の書籍を集め、江戸の下谷の中邸に「二三千巻書閣」という書庫と「対古人」という書齋を作りました（以上「」部分は『津市史』第三卷P693と『随斎詩鈔』からそれぞれ引用）。

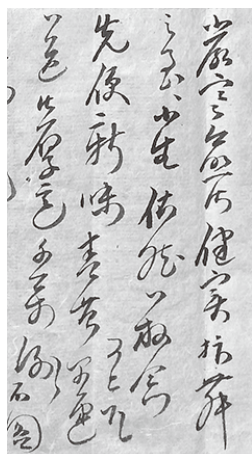
それでは、こうした逸話を持つ彼にはどのような友人や知人がいたのでしょうか。彼の友人として真っ先に名前が挙がるのは、やはり幼い頃からの親友であった齋藤拙堂でしょう。彼は随斎が亡くなった際には追悼の漢詩を作っています。拙堂以外では、京都の頼山陽や猪飼敬所、幕臣の岡本花亭らさまざまな人物と交流があり、その中には津八町の商人稲垣定穀もいました。随斎は、定穀の著書である『伊勢志略』（未刊）や『八國接壤図』（天保五年刊）の序文を書いており、また「稲垣文庫」には「塩田随斎書簡」（稲28-17）と題された、随斎から稲垣佐平（定穀）に宛てた書簡一通と漢詩一枚が所蔵されています。

書簡について見てみると、まずは「嚴冬愈御健実…」と挨拶から始まり、以前「新味青苔（初物の青海苔か?）」を「早速」送ってもらったことに対し「御厚意千萬」とお礼を述べています。その後、「徐福」（秦の始皇帝の時代の人。不老不死の薬を求めて旅立ち、日本に漂着。その際さまざまな技術を伝えたとされています。漂着地は諸説あり、熊野地方はその一つ）が伝えたという「徐福紙」（「那智紙」の別名。「那智紙」は熊野地方、特に現在の和歌山県那智勝浦の辺りで明治十年頃まで作られていた良質の和紙）の入手や、「陟釐」（「側理」という昔海苔（海草）で作っていた紙について書いています。更に、同梱の「初嘗勢海苔脯率蛙長歌寄洲佐平老人」と題された漢詩にも「苔脯（海苔）」や「陟釐」・「徐福紙」の名が見られ、詩の内容もこれに関係していることから、二人は「徐福紙」またはそれに類する紙についてやり取りをしていたようです。書簡の年については「十一月廿四日」とあるのみで詳しくは分かりませんが、同梱の漢詩に「天保乙未年仲冬念四日」（乙未年は六年、仲冬は十一月の異名）と見えることから、同じ年だと考えられます。ここから、天保三年に随斎が江戸に帰ってから定穀が天保六年十一月十九日に亡くなるまでの間、二人が交流をしていた様子が伺えます。（以上「」は資料からの引用）

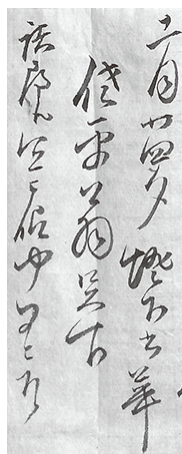
駆け足になりましたが、今回は漢詩集を、今回は知人への書簡をそれぞれ取り挙げつつ塩田随斎について紹介しました。ここで初めて塩田随斎の名前を見たという方も、これらを通じて郷土ゆかりの彼について少しでも知っていただけたらと思います。

参考文献

松田豊幹編『草陰冊子』第十四卷（三重日報社 明治二十五年）、梅原三千・西田重嗣著『津市史』第三卷（津市役所 昭和三十六年）、浅野松洞著『三重先賢傳』（東洋書院 昭和五十六年）、下中邦彦編『和歌山県の地名』（日本歴史地名大系第三一卷 平凡社 昭和五十八年）堀内信篇『南紀徳川史』第十一卷（清文堂出版 平成二年）、齋藤正和著『齋藤拙堂傳』（三重県良書出版会 平成五年）、市古貞次〔他〕編『国書人名事典』第四卷（岩波書店 平成七年）、中川豊著『稲垣定穀書写年表』（『中京大学文学会論叢』第三号所収 平成二十九年）（他）



『塩田随斎書簡』冒頭



『塩田随斎書簡』宛名など

レファレンス 事例集



Q
A

藤堂藩弓術流師範「吉田雪花」について知りたい。

「藤堂藩の年々記録上・下巻」によると「雪花」は「雪苛」ではないかと思われます。藤堂高虎は、吉田流の正統を受け継ぐ吉田六衛門元尚を招聘し弓術師範としました。吉田六衛門元定（重勝）が吉田雪苛であり吉田六衛門元尚の父親であるとの記載があります。

「藤堂藩の年々記録上・下巻」

村林 正美/校訂 三重県郷土資料刊行会

～図書館員のおすすめの本～

「海女小屋はちまんかまど 世界とつながる」 野村禮子 野村一弘／著 伊勢新聞社

三重の相差で生まれ育った野村禮子さんは息子の一弘さんと共に、食事をしながら海女の話が聞ける「海女小屋はちまんかまど」を立ち上げます。

相差で生まれたら海女になるしかないと言われた時代に海女になった母と、外国人視察ツアーを受け入れることで「海女文化の体験」の商品化に成功した息子のこれまでの歩みを紹介し、海女文化への思いなども語られています。三重県内に住んでいても、なかなか見る機会のない海女さんの今を知るきっかけになる1冊です。

「寿命図鑑 生き物から宇宙まで万物の寿命を集めた図鑑」

いろは出版／編・著 やまぐちかおり／絵 いろは出版

寿命は、生き物にとっては命の長さ、ものにとっては使用に耐える期間のこと。くすっと笑える一文と、天使のわっかがついたイラストがくせになる面白い図鑑です。

例えば、ケーキの寿命は1日（「買った日に食べて欲しい」）、大リーグのバットの寿命は8ヶ月（「どうせ折れるならホームランにして」）、自動販売機の寿命は10年（「雨にも負けず、風にも負けず」）…。

子どもも大人も読みだしたら止まらなくなるので、ぜひ時間のあるときにどうぞ！おすすめです。

開館時間・休館日などのご案内

館(室)名及び所在地		開館時間	館(室)名及び所在地		開館時間
津図書館 ☎229-3321	西丸之内23-1 津リージョンプラザ内	平日／9:00～19:00 土・日曜日、祝・休日／ 9:00～17:00	安濃図書館 ☎268-5822	安濃町東観音寺418 津市サンヒルズ安濃内	10:00～18:00
久居ふるさと文学館 ☎254-0011	久居東鷹跡町2-3	平日／9:00～18:00 土・日曜日、祝・休日／ 9:00～17:00	きらめき図書館 ☎292-4191	香良洲町2167 津市サンデルタ香良洲内	9:00～17:00 (7-8月の平日は18:00まで)
ポルタひさいふれあい図書館 ☎254-0464	久居新町3006 ポルタひさいふれあいセンター内	平日／10:00～21:00 土・日曜日、祝・休日／ 10:00～18:00	一志図書館 ☎295-0116	一志町井関1792 津市とことめの里一志内	10:00～18:00 (7-8月の平日は19:00まで)
河芸図書館 ☎245-5300	河芸町浜田782	10:00～18:00	うぐいす図書館 ☎262-5000	白山町二本木1139-2 津市白山総合文化センター内	平日／10:00～18:00 土・日曜日、祝・休日／ 9:00～17:00
芸濃図書館 ☎265-6004	芸濃町椋本6824 津市芸濃総合文化センター内	9:00～17:00	美杉図書室 ☎272-8092	美杉町八知5580-2 津市美杉総合文化センター内	9:00～17:00
美里図書館 ☎279-8122	美里町三郷51-3 津市美里文化センター内	9:00～17:00	休館日(全館共通)		火曜日・毎月最終木曜日(館内整理日) 年末年始(12月28日～1月4日)

※特別整理期間(年1回、14日以内)などで、臨時に休館することがあります。

詳しくは、図書館カレンダー、津市図書館ホームページなどをご覧ください。

津市図書館ホームページ及び携帯版ホームページ <http://www.library.city.tsu.mie.jp/>



携帯電話QRコード

本の返却は期限内に

ようこそ図書館へ 第24号

発行日／平成30年3月1日 編集及び発行／津市教育委員会事務局 津市津図書館
三重県津市西丸之内23番1号 津リージョンプラザ内 ☎(059)229-3321